

X指定
18才
以上



傀

イ
個
個

三
個

教

Case02: 麻宮アテナ

鬼

個

個

教

Case02: 麻宮アテナ



傀儡調教

Case:02 麻宮アテナ
目次

| | |
|----|-----|
| 序章 | 5p |
| 口虐 | 10p |
| 密談 | 14p |
| 焦燥 | 15p |
| 食事 | 22p |
| 乳辱 | 23p |
| 遊戯 | 31p |
| 洗脳 | 37p |
| 公開 | 41p |
| 後記 | 60p |
| 終章 | 61p |

作画：村上 雅貴
文責：榊 しげる

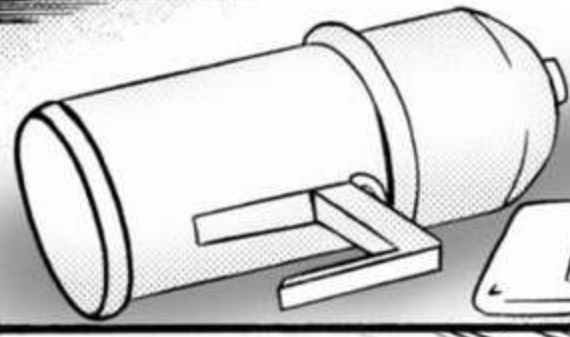
2003. 8. 17
スタジオきゃうん



一体何の
真似です！

さくら
さん！

コト...



...ん
よしと



アテナさんに
今射たのは
ナノマシンです



いいですか
アテナさん

今から
アテナさんは

牝奴隷に
調教されます



6



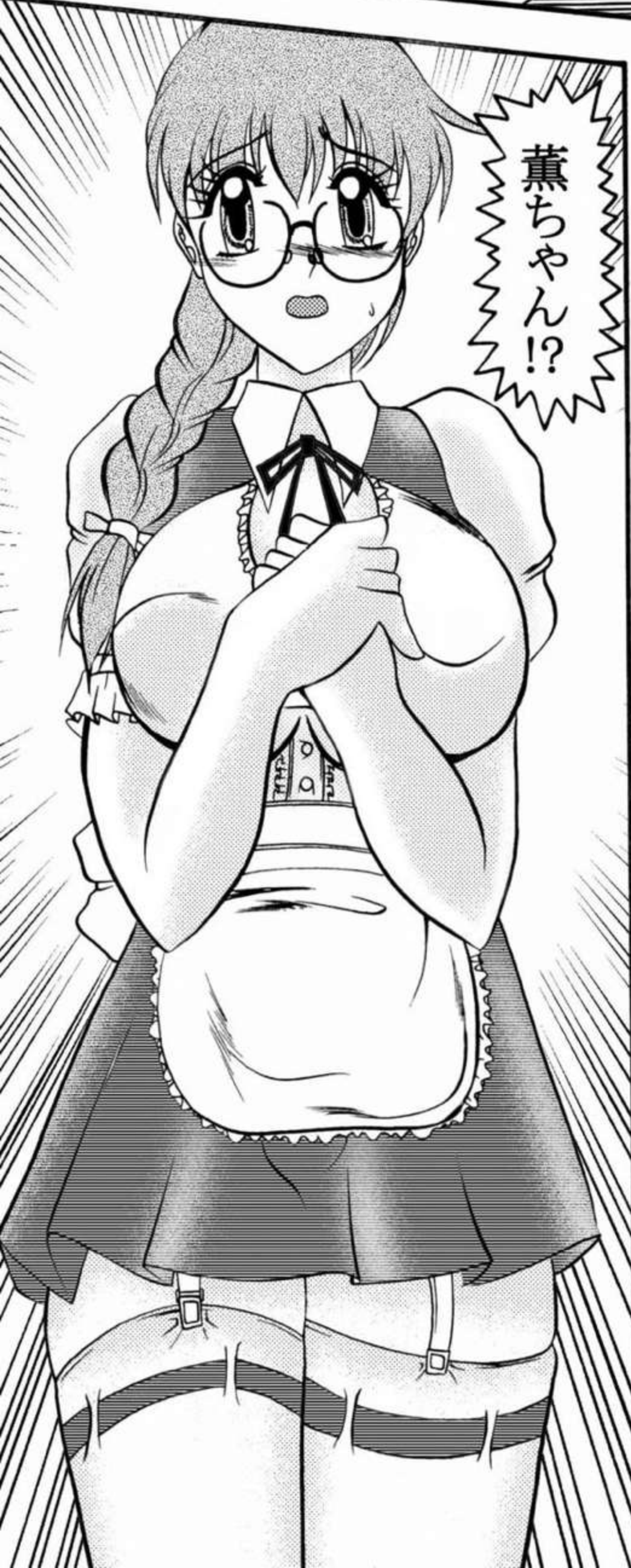


なんで
とまんないのお

エッ?
ウソッ!?

わわっ
たんま...
ストップ!

つて
ええ!?



薫ちゃん!?



はい
そこまで

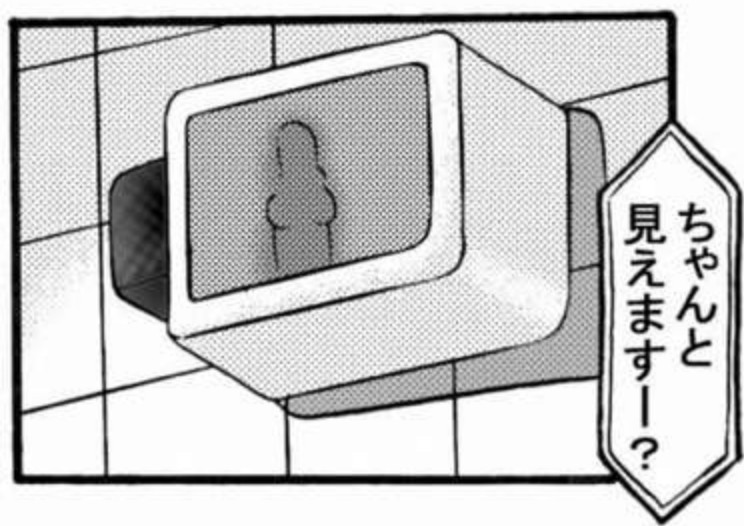


あ...

アテナさん
こっち見て
くださーい



いつの
間...



ちゃんと
見えますー?



な...!



どう思います？
この状況

う...あ
ア...
アテナさん...



...エル



あぶなかったね
さくら



ちよつと
ビックリよね
きょうだい...

アテナさんってば
サイコパワーで
ナノマシン
壊しちゃうなんて



さて賢い
アテナさんなら
おわかりでしょうケド

く...



私を...
好きにして
ください...



わかり
ました...



...



アテナさん
しないで...

どうなるん
でしょうねえ？

く...つ
卑怯な...

ハタチ...



さっすが
アイドル

いいプロポーション
してますね

ふんふん

ふんふん

たのしみ
たのしみ



それじゃ
あらためて

あとは
おまかせ

んじや
さくら

さんきゅ
エル



アテナさん
上着脱いで

それから...
スカートあげて
見せてね

そんな事!



あつれえ?
そんな事
言つていいの
かな?

...



わ...
わかりました...

ふんふん

そうそう♪
あ、入浴♪
アテナちゃん



14...



「それじゃあらためてナノマシンを入れますけど、今度は壊さないでくださいねえ。」

「けっこう高いんですから、コレ」

再び体内に異物を入れられ、不安におののくアテナに最初に下された命令は着替えだった。どんな無理を要求されるのかと怯えていたアテナは拍子抜けしながらも差し出された服に着替えようとして絶句した。

「こんな服……着れるわけ……」

喉もとまで出かかった言葉を必死に呑み込んだ。自分が抵抗すれば彼女は容赦なく人質にものをいわせるだろう。アテナは唇を噛みしめながら、用意された服に袖を通す。

さくらが用意した服はいままで着ていた衣装とまったく同じもの。ただし、全体が極薄の生地できており、胸も股間も生地を通してスケて見える卑猥なものだった。

「な…っ、さくらさん…男の人…だったんですか…?」
「ちっがーうっ! これはね、ナノマシンでちよちよいと作ったのさ。ちやんと
精液も出るんだよ。すごいでしょ」
もつとよく見る、とばかりに灼熱じきった肉棒でアテナの左右の頬を交互
にグイグイと押し上げる。
「い、いやああっ」

おぞましさに眉をひそめ、羞恥で真っ赤に染まった顔をそむける。アテ
ナの過剰な反応に嗜虐心をそそられたさくらは、
「またまたあ、リカマトトぶっちゃって…アイドルなんだからチンコなんて見慣
れてるでしょ!!?」
「そ、そんなことありませんっ」
偏見に満ちた揶揄に不快感を露わにするアテナの顔にさくらはなおも
肉棒を押しつけた。

「んじや、早速フエラチオしてくださいね」
「ふえ……ち……、え……なんですか……？」
「本当に知らないの？ んー、しようがない……やり方教えてあげましょう」
「え……いや……身体が勝手に……」
脳内に着床したナノマシンから電気信号が発せられ、アテナの身体を動か
しはじめた。自分の意思と関係なく身体が動き、眼前にグロテスクな男性
器が迫る。そそり立つ肉棒を咥え込もうとする唇を必死に押し留めようと

するが、身体はアテナの意思に従わなかった。
「や……いやあ……んぶうっ……」
尖端の傘に唇が当たったかと思うと、よどみない動きで口腔が押し沈めら
れた。

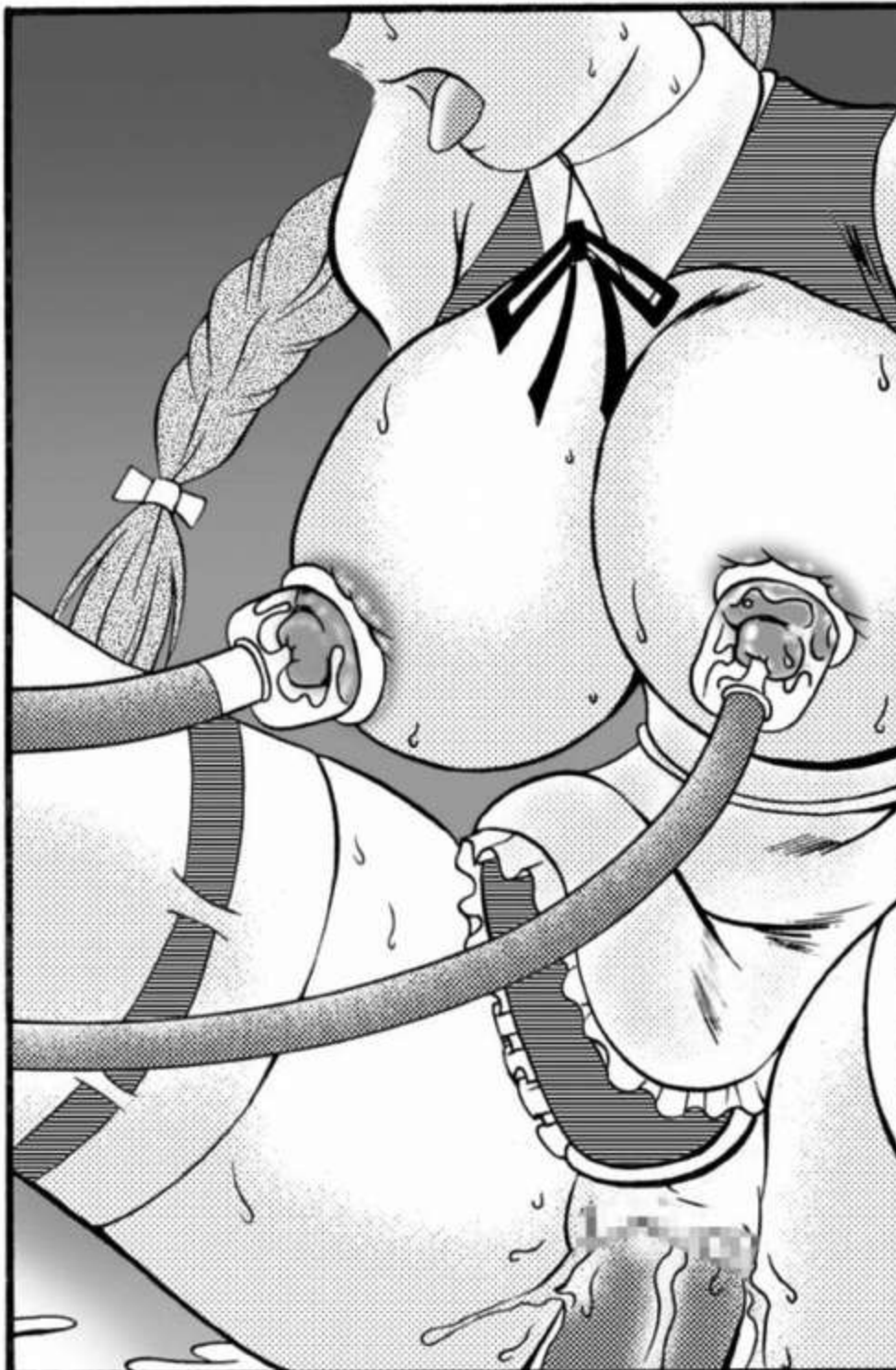
ナノマシンのナビゲーションによる口腔奉仕は三十分にも及んだ。身体を勝手に動かされているとはいえ、疲労は確実に蓄積する。ハードな行為の連続に顎の感覚が無くなりはじめた頃、
「今日は、このへんで勘弁してあげる。早くフェラテクを会得してねん。あ、いまから出すけど吐いちやダメだよ」
「んーっ、んうんっ」

おびただしい量の熱い粘液がアテナの口内に放出された。嫌悪感から反射的に嘔吐しそうになったアテナは、反射反応さえ自分以外の何者かに支配されていることを思い知った。口内に溜まった白濁液は味わうように数度咀嚼された後、アテナの胃の腑に嚥下されていた。
「まずいですか？ 苦いですか？ でも大丈夫、そのうち自分から飲ませてくださいって言うようになりますからねえ」

インターミッション：密談

「さっきはたすかったよ、エル。いやあ、まさか体内に入ったナノマシンが壊されるなんてね〜」
「何言ってるの。事前調査報告書でも『サイコパワーによる不測の事態が起こる可能性』は示唆されてたでしょう？」

口では怒ってみせたエルだが眼が笑っていた。書類等を読むのが苦手な、万事が大雑把なさくらのドジはいつものことだった。それをフォローするのも自分の役目と割り切っている。なにしろ、エルはお調子者のこの相棒を不思議と気に入っているのだ。
「代替りのはいまアッチで作ってもらってるから、それまでは既存ので我慢してね」



「うんうん、いつもすまないねえ…」

「それは言わない約束でしょ…」

型通りのやり取りを交わした後、さくらはエルをお礼のお茶に誘った。珍しく殊勝な態度を見せるさくらを不気味に思ったが、一応素直にごちそうになることにした。

「ところでアッチの様子はどう？」

「ん？ アッチって？」

「チンコ」

男性器の俗称を羞かしげもなく口ににするさくらに苦笑するエル。そもそもそれで相手に伝わっているのもどうかと思うが、エルは長い付き合いからさくらが何を聞こうとしているかちゃんと把握していた。

「いま肉体改造してるトコ。といっても素材をセットしたら、あとは自動でやってくれるから楽なモンだけど」

「まだ始めたばかり？」

「それはそうよ……何？ その『いいこと思いついた』みたいな笑いは？」

音で表現するなら『にひひ』だろうか。さくらは人の悪い笑みを浮かべながら、エルの耳もとに口を寄せると、声をひそめる。二人きりの部屋で耳打ちすることに何の意味があるのかとも思ったが、素直に耳を傾ける。

「睾丸大きめにしてくれない？」

「んー、改造の依頼主がアレだから、あまり無茶はできないんだけどなあ…」

「だめえ〜？」

拗ねた演技でエルを見上げるさくら。敵わないなあ、と思いながらエルは、
「ま、多少の誤差が出るってことは契約書にも明記してあるから、少しいは…ね」

さくらに向かって片目をつぶってみせる。

「わーい、だからエルって好きよ」

「そうね、ついでに精導管も太めにしておきましょうか」

「ふっふっふ…そちも悪よのお」

「いえいえ、お代官様にはかないません」

再び型通りのやり取りを交わした二人はどちらからともなく、ホッホッホッと高笑いを部屋中に響き渡らせた。






一週間に渡る屈辱のフェラチオ教習。今日から第二段階に移ります、と宣言したさくららは初めてナビなしでのフェラチオを強要した。技法は舐めに刻み込まれていたが、もともと気の進まぬ行為にアテナの動きはぎこちない。「あんなに練習させたのに…アテナさん物覚え悪いなあ、やる気あるんですか？」

「あ、あるわけじゃないですか！」

「うーん、苦しむのは自分なのに…あのね…」

さくららもつたいっつけている間にすでに異変は始まっていた。下腹から生じた熱は瞬く間に全身へと伝播し、アテナの舐めを支配した。性衝動がビッドがサルから進化したときに退化した動物としての原初的な感覚だった。



「どう？ エッチな気分になってきたでしょ？ カウパー腺液を感知するとナ
クマシンが脳に直接発情の信号を送るの。つ・ま・り、アテナさんにとつて
先走り汁はガード不能の超強力媚薬なんだよお」
「そ、そんな…ひどい…」
さくらを恨みがましい眼で睨みつけながらも、湧き上がる欲情に後押し
されるように積極的に舌を動かしてはじめるアテナ。舌をよじれるほどネバッ

こく巻きつかせながら、左右の頬の内側と上顎へ、尖端をぶつけるように
擦りつけたり、頬をすぼめ、粘膜全体を使って吸い上げたり、教えられ
た舌技を駆使して射精を促す。溢れるカウパー腺液を舐め取ることで躰は
さらに昂ぶりアテナを追い詰めていく。だが、しかし、
「はい、時間切れ。今晚はかなり辛いだろうけど我慢してね」

時間切れを宣告され、調教部屋に取り残されたアテナはベッドに横たえた火照る身体をもてあまし、悶々としていた。意識すまいと思っても、勃ちっぱなしの乳首が服の裏地に擦れるだけで甘い悲鳴を上げてしまう状態では、寝返りをうつこともできない。
(少しでも鎮めなきゃ…眠れない……)
自分自身に言い訳しながら股間部分の薄い生地の上から疼きを訴える秘裂に指を這わせる。「ひゃうっ——そと触れただけなのに、痺れるような快感が背筋を駆け抜けていった。一度綻びをみせた自制心は崩壊も早かった。はじめは両太腿の間に手を差し込むようにしていたのが、肉芽や肉襞から湧き上がる愉悦に押し流されるように、徐々に内腿が大きく開いていく。





秘裂に沿って這わせていた指は次第に深く喰い込んでいき、薄い布地ごとアテナの中に埋没していく。普段の清純なアイドル姿からは想像もできない色情狂そのもののオナニーだった。しかし、激しさを増す指使いに反してアテナの欲情は時間とともに募っていくばかりだ。
（ど……う……して……）
体内にうず巻く歓喜は、アテナがこれまで体験してきた絶頂の瞬間を遥かに凌駕していた。それでも昇りつめることができない。過酷なまでの歓喜の波と、なお癒され尽くされることのない欲情のうねり。
「どうして……どうしてイケないの……イキたい……イキたいよお……このままじゃ……私……おかしくなっちゃう……」



「もう……うるさくて眠れないよ」

「寝呆け眼をこすりながら現れたさくらにアテナは半泣きになりながら訴えた。」

「私……イキたいの……イ……イケないの……こんなに気持ちいいのに……いつもなら……もう……なのに……どうしてえ……」

「人二倍強い羞恥心は苛烈を極める焦燥の連続にとうに磨耗しきつていた。」

「んーそんなにイキたいんですかあ」

「イキたい……イキたいよお……イカせてよお……お願いいつ」

「簡単ですよ、精液飲めばいいんです。精液飲めばいつでもどこでも手軽にイケますよ。そのかわり精液飲まないかぎり絶対イケませんから」

「せ……せ……えき……?」

「く……ください……精液……飲ませてください……」
媚びた瞳で見上げながらアテナは恥も外聞もなくさくらの股間に顔を擦りつける。絶頂を迎えることができるのなら、命を差し出しでも惜しくない、そんな状況まで追い込まれていた。
「わわ……ちよつと待った。そんな起きたばつかでチンコなんて立たないよ。代わりにコレあげますから」

さくらはポケットから口を縛った使用済のコンドームを取り出した。

「トイレのゴミ箱に入ってたんだけど……ほじい？」

「ほじい……ほじい……精液飲ませてえつ」

「わかったわかった……がつかないの。はい、あーんして」
餌をねたる雛鳥のように大きく開いた口に、ドロツとした粘液を流し込んだ。



ゴクツ——液体というより固形に近い粘度をもった精液が喉を通過した瞬間、
「ひいひいあああああつ」
これまで出したこともない、高く獣じみた声を放つと、四肢を歓喜の絶頂に打ち慄わせ
ていった。待ちに待った絶頂にアテナはブルブルと太腿を慄わせながら、全身を弛緩させ
た。緩んだ尿道から黄金色のゆばりが迸った。
「あーあ、床汚しちゃつて、もう……ちやんと拭いてから寝てくださいよ」
さくらの声に、アテナは四肢に愉悦の波涛を感じながら、自分自身が信じられない表
情で首を縦に振った。溶け渡るような官能の痺れに声も出せない状態に陥っていたのだ。



なぜなに
「ナノマシン」

- ナノマシンを使った乗り
- ちんぽをはやす
- あいばいを大きくする
- 感じやすい体にする
- あいばいを感じら

いたアテナにとっては意外なほど豪華な品揃えだった。

「はい、お食事&なぜなにナノマシンの時間ですよ～。みんな集まれ～って一人しかいないか。では食べながら聞いてくださいね」

アテナが食べはじめるのを待ってさくらはナノマシンの性能を説明する。

「人間は脳に支配されています。脳とはニューロンネットワークの塊。ナノマシンはそのニューロンネットワークに介入、さらには支配することで人間そのものを支配することができるわけです」

自分で説明しておきながら、さくらは半分も理解していない。別に構わない。車がどうやって動いてるか知らなくても運転はできる。

「特に感覚は脳の一部を誤作動させるだけで可能なので、いろんなことができます。変化や誤認、時間をかければ性格なんかも変えることができます…って、怖っ」

エルが作った講義用文書を読み上げながら、さくら自身も勉強になっているようだ。

「他にも人の身体の一部を変質させることもできます。変質箇所の細胞をES細胞に戻し、任意の形で固定……むー、とにかく、チンチン生やしたり、オッパイ大きくしたり、そんなことができるの」

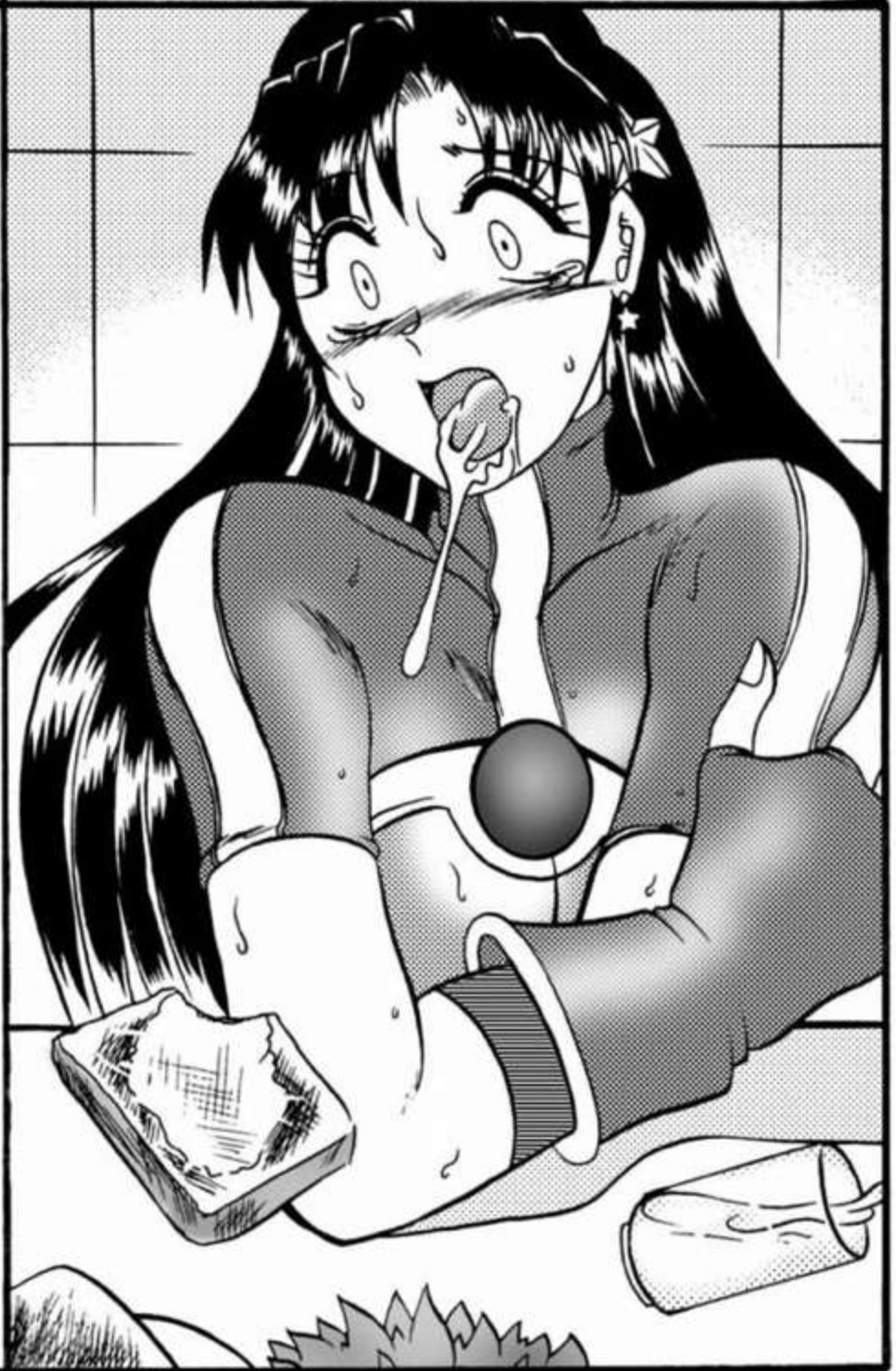
講師が理解していないものを受講者が理解できるはずもなく、アテナはモグモグと口を動かしながら、要点だけをかいつまんで理解しようと努めてい

「ぐっもーにん、朝食もってきましたよ～」

朝からハイテンションのさくらが勢いよく足でドアを開けて入ってきた。右手には食事の乗ったトレイ、そしてなぜか左手には移動式の大きなホワイトボードが握られていた。

アテナの食事用のテーブルの前にホワイトボードをデンと設置すると、手際よく配膳を始める。テーブルクロスの上に日本の平均的な朝食メニューが並べられていく。

きつね色に焦んがり焼けたトースト、冷たい牛乳、瑞々しいサラダ、ベーコンを添えた半熟の目玉焼き。マーガリンやジャム、ドレッシングなども完備した完璧な朝食だ。囚人に近い気分を味わって



た。
「…で、アテナさんに入れたナノマシンは『精液を飲むとイッちゃう』という指令を出しているので…」

「ひいやあああつ」

絶叫とともにアテナは座った姿勢のままビクンビクンと上体をのけ反らせた。突然頭の中が真っ白になり、歓喜のうねりが五体を貫いていく。

「あつたり～、つまり、こうやって食事に精液が混ざってるのを食べてもイッちゃうんですよー、って聞いてます？」

食べかけの食事の前でアテナは焦点の合わない視線を虚空に彷徨させたままだった。



口腔奉仕に対する積極性が増したことで、アテナのフェラチオ技術は飛躍的に向上していた。アテナにとっては精液を絞りとれるかどうかは、その日の安眠がかかっている。精液を飲めず、イキそこなった夜は、疼く身体を慰め続けるだけで、朝を迎えることになる。必要に迫られた技術は会得も早い。
「んむう…はうむんんう……」
尖端部に被せた唇を、傘から幹の側面に沿って這いまわらせた。側面、裏側、根もとへといやらしく唇を滑らせ、再び尖端部に戻ると、大きく息を吸い込み、唇を押し被せていく。尖端が唇を押し上げ、口腔の粘膜を擦り、喉もとまで達しただけで、絶頂感にも似た歓喜に見舞われていた。アテナにとって性交とは口で行うものだった。

唇をすぼめ、口腔の内側全体を肉棒に密着させた。そのまま二回、三回と顔を上下に揺すり返す。さらに片手で幹を支えたまま、アテナは根もとの袋にもう一方の手を這わせた。掌で優しくくるみ、柔らかく揉みほぐす。これは最近覚えたテクニックだった。なにしろ口腔奉仕の相手は常にさくらなので、次々に新しい手法を試みなければ、すぐに飽きられてしまうのだ。

肉棒が破り裂けんばかりに膨張した次の瞬間、アテナの口腔から肉棒が引き抜かれ、眼の前に突き出された。赤銅色に膨らんだ尖端から、ドピユウ、ピュルルウと奔流のような白い液体が迸り出てくる。

顔にかかった熱い粘液を指先ですくい取り、口もとに運んだアテナはまるで極上の蜂蜜を舐めるように飲み下した。

「はふうふうつ、イツちやうふうふうつ」



「あ……あはあ……精液い……おい……しい……」
脳内を絶頂の余韻で痺れさせ、口の中に残る白濁液を舌の上で転がしながら
惚けているアテナにさくらは新たな試練を与えた。
「はいはい、アテナさん、うっとりしている場合じゃありませんよお。今度は
口も手も使わずにやってみましょう」
「え……？ あ……あの……どうすれば……いいんですか……？」

「それぐらい自分で考えなきゃダメ。制限時間は無いけど、いまから五分ご
とにカウパー飲んだときと同じ発情信号出すから、早く精液出させないと気が
狂っちゃうよお。それじゃ、スタート」
どうしていいかわからずしばらく呆然としていたアテナを追い立てるように最
初の信号が発信された。

「あ、あの…見て…ください……」
思案の末にアテナは四つん這いになると上体を倒し、秘めやかな部分がよく見えるように尻肉を割り裂いて露出させた。
「み…見えますか…アテナのオ…オマンコ…コ……」
「うんうん、よく見えるよ。ピンクのヒダヒダがヒクついてるところも真っ赤に充血したクリトリスが皮から剥き出しになってるよ丸見えだよ」

わざと卑猥な言葉で描写されアテナは羞恥に首すじまで真っ赤に染め上げる。が、ここでやめるわけにはいかない。人差し指と中指を花唇にそつと当てがうとV字を作つて押し開く。
「アテナのオマンコ…精液欲しくて…こんなに濡れてるの……お願い…です…オマンコに…精液…出して…ください……」
「んー、中学生じゃあるまいし、オマンコ見ただけじゃねえ」



「そ…そんな…ひやうううんつっ…」
もう五分過ぎたのか、ナノマシンから信号が発せられ、アテナの身体を発情させていく。さくらに秘所を見つけた姿勢のまま、アテナは肉体の欲するまま、オナニを始めた。花唇を開いていた指を深々と挿入し、熱く潤った媚粘膜を攪拌する。
「もしもおし、なんか忘れてません？」
自慰に没頭していたアテナはさくらの指摘に本来の目的を思い出し、挿入した指をクパアと開き濡れ塗れた肉壁を露呈した。
「あはああ…見てえ…見てくださあい…アテナのオマンコ…こんなにグチヨグチヨなお…ビクッビクッて精液欲しがってるの…お願い…ちようだあい…精液出してえ…」
「ん、惜しい。私が男だったら、これだけでも射精しちゃいそうなくらいエロいですよお、アテナさん」

「精液い…せーえきい…ほしいのお……」
「あ、やば、アテナさんおかしくなりかかてる……あのね、オツパイ使
うんですよ。パイズリつて知ってます？」
「ばい…ずり……？」
虚ろな瞳で見上げながらオウム返しで答えるアテナ。
「オツパイの谷間にチンコ挟み込んで、両側から圧迫するように擦って愛
撫するんですよ」
精液への欲求に精神を支配され、すでに意識も朧なアテナは、言われ
るがままに恥辱の行為を遂行しようとする。服をたくし上げ形のよい胸
を露出すると、汗ばんだ双乳の狭間に肉棒を当てがった。
「あ…あつ…い…」



「……これで……いいですか……？」

熱く張りつめた肉房で左右から挟むと、肉棒は半ば姿を消した。包みきれないのはアテナの乳房が小さいからというより、さくらの肉棒が大き過ぎるせいだろう。

「そうそう、そのままオツパイでチンコ擦ってね」

加減がわからず、そつと握り締めた左右のふくらみで、アテナはオズオズと肉棒をさすり上げた。溢れ出した粘液と汗のヌルツとした滑りによって、まるで口腔性交か、普通のセックスをしているような錯覚を引き起こしてきた。両膝をついたまま、アテナは精液を絞り出そうと、二つの乳房で肉棒を締め上げる。

「うん、けっこう上手いじゃん。あ、舌で先っちょ舐めてね。口はだめだけど舌はOKだから」

精液を渴望するアテナの双乳による愛撫は苛烈を極めた。特に指示を与えなくても、柔らかな肉房を縦横無尽に使って肉棒を責めたててくる。精液飲みたさの積極的な行動にさくらは苦笑しながらも、合格の判断を下した。

「はあい、いいですよ。上手くできたご褒美に出してあげます。ちゃんと受け止めてくださいね」

「はいいい……出して……アテナの顔にいっぱいせーえきかけてください」

ビュクッ、ビュルルッ——灼熱の肉棒から勢いよく噴き出した白濁液はアテナのピンクに上気した顔に飛び散ってきた。

「あああんっ」

乳房の谷間から噴火したドロドロの溶岩をアテナは極上のスマイルで受け止めていた。



うん



よしー！

んしよ



う...あ

はあ...



う...ん

う...ん

う...ん



ゲームオーバー
コンティニュー
づした場所からやりなおす

あッあッ...

32





わ…私…
アテナは…

精液大好き…
精液便所
なんです…

精液ゴックン
したいの…

お願いします…
アテナのお口に…

精液…
飲ませて…

精液たくさん
飲ませてください…

ふん…

ふん…

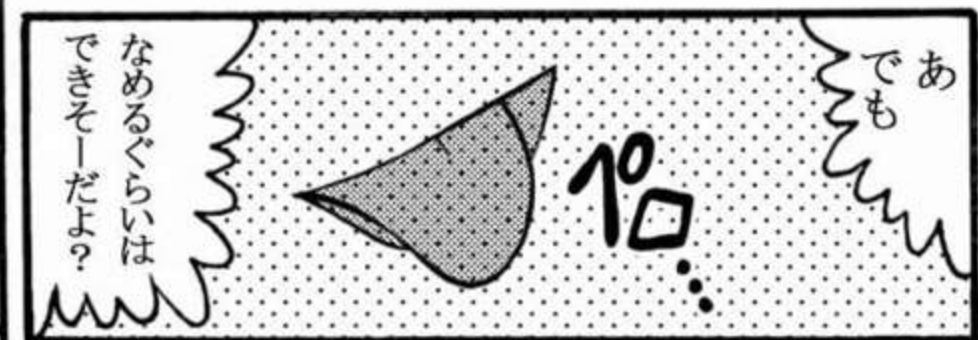


はい
よく
言えました

たぶん、

昨日の夜
オナニー
しました

それじゃ
コレ…
飲ませて
あげますよ





ビッ...

グッ...

あははっ
アテナさん

精液
おいしいー
ですかあ?


おいしい...
精液おいしいのお...

うあぁ...
イッチャうう...
いひい...

びっ...

う...ひやあうう...
精液...せーえき...

びっ...



ナノマシンで身体の動きを封じられた状態でアテナは調教部屋に放置された。部屋の中は常温にもかかわらず、アテナの肌はじつとりと汗ばみ、薄い生地のを貼りつけていた。服を突き破らんばかりにそそり立った乳首、包皮を脱ぎ去って充血したクリトリス、花唇から溢れる豊潤な愛液：アテナが発情していることは瞭然だった。

(あう……え……う……わ……たし……このままじゃ……おかしく……なる……狂っちゃう……よ……)

無理矢理啜えさせられたホリスからは一定時間ごとに、アテナを発情させる液体——カウパー腺液が送りこまれていた。収まらない欲情、与えられない絶頂、狂おしいほどの欲求に苛まれながら、アテナはイクことだけしか考えられなくなっていく。



「むぐう…んむうううう…んんう…」
ホースのせいで言葉にならない叫び声を上げ続ける。いや、ホースが
なくても意味をなしたかどうか疑問だった。それほどアテナの精神は
追い詰められていた。すでにカウパー線液の投与は停止していたが、発
情状態は収まることがなかった。
「イキたい…せ…えき…ほしい…ほしい…チンポ…舐めて…のみ…たい…せ…
えきのみ…たい…ほしい…ほしいのおつ」
アテナの頭の中は精液とそれを出してくれる男性器でいっぱいだった。
精液と男性器のことしか考えられない。
「へ…えひ…ほひ…い…い…へ…えひ…ほ…らい…」
放置責めから数時間後、ついにアテナの精神は正常の枠から逸脱し
てしまった。



「アテナの状態をナノマシンから送られるデータでモニターしていたさくらは、頃合と見て調教部屋におもむいた。」

「アテナさん、精液欲しいでしょ？」

「ほしい…せーえき…ほしい…ろお……」

「そうだよね。だってアテナさんは精液大好きだもんね」

「すきい…せーえき…だいしゅきい……」

「アテナさんは精液飲むのが大好きな変態アイドルだもん。当然だよ。精液飲まないと生きていけないもの」

「混濁する意識に染み込ませるように、わかりやすい言葉で語りかける。」

「わ…たし…精液大好き…精液飲むの…好き…変態…精液大好きアイドル…精液飲まない…死んじゃう……」

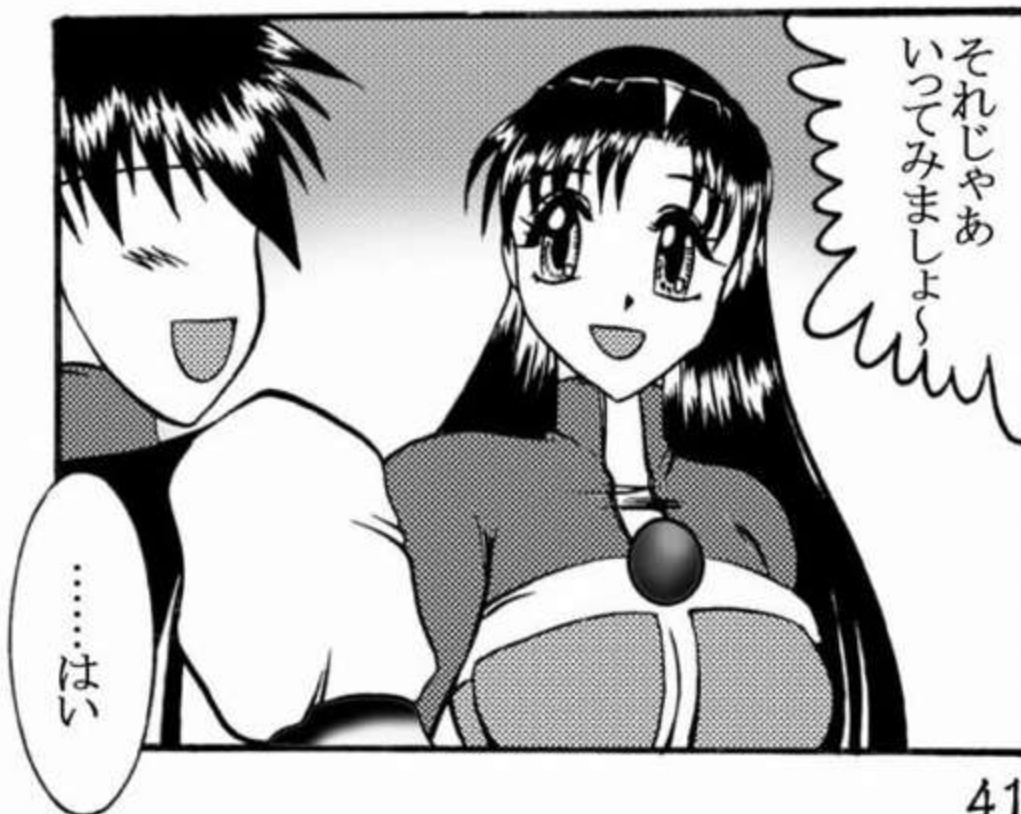


ナノマシンによる拘束を解かれたアテナは眼の前に用意された男性器にむしゃぶりついた。それが誰のものか、そんなことはどうでもよかった。事実、アテナの視界には男性器しか映ってなかった。

「あはああつ…オチンポお…ちようらあい…精液だひてえ…んんむぶうううつ」

【報告書 KW-005 麻宮アテナ】

極限状態に追い込んだ洗脳によってアテナは自分が精液奴隷であることを受け入れました。男性器を見るだけで発情し精液を欲しがるようになっていきます。精液を飲めば必ず絶頂に達する精液アイドルです。なお今回撮影するビデオはプロモーション用ではなく、クライアントのプライベート用になります。





男の人の
オチンポを
なめて…



私…
アテナは

精液大好きなの…
変態アイドル
なんです…



ド変態
なんです…



精液を
すすって
生きてる…

…ド…



おっぱいも
オマンコも全部

アテナの
いやらしい身体は
男の人に精液
いただくための
ものなんです…



アテナの
いやらしい体を
見て…

オチンポ
ギチギチに
固くして

精液
いっぱい
つくってください



え…!?



アテナ
さん…



さすが
アイドル
ナイスポーズ♪
それじゃ
アテナさんの
お相手の入場です







あ…あ
オチンポ…

オチン…ポ…



どうですか？
スゴイでしょ？
私のより
立派ですよ

う…あ



キンタマにも
精液
たっぷり

う…やん…



さあ
アナさん？
こんな
おいしそーな
ゴチソウ前にして

ハァー

あ…あ

ハ…



ああ…っ
い…い…

ハァー…



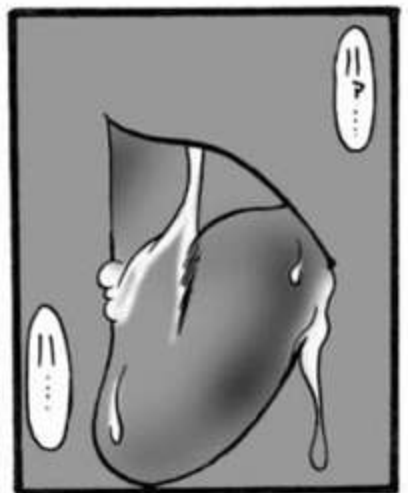
ア…
アテナ…さん…

はあ…あ
オチンポお…



我慢しなくて
いいんですよ

う…あ



はい
ストロープ



あう…
ふあ…あ



はあ…
なめる…
なめるのお…
精液…
飲みたい…



え…

そんな…
どうして…

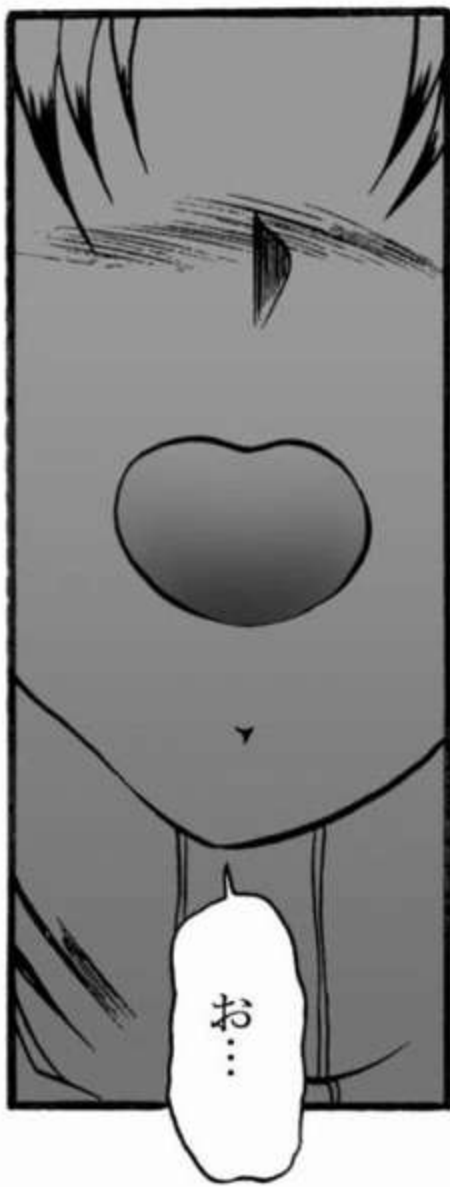
我慢しなくて
いいって…



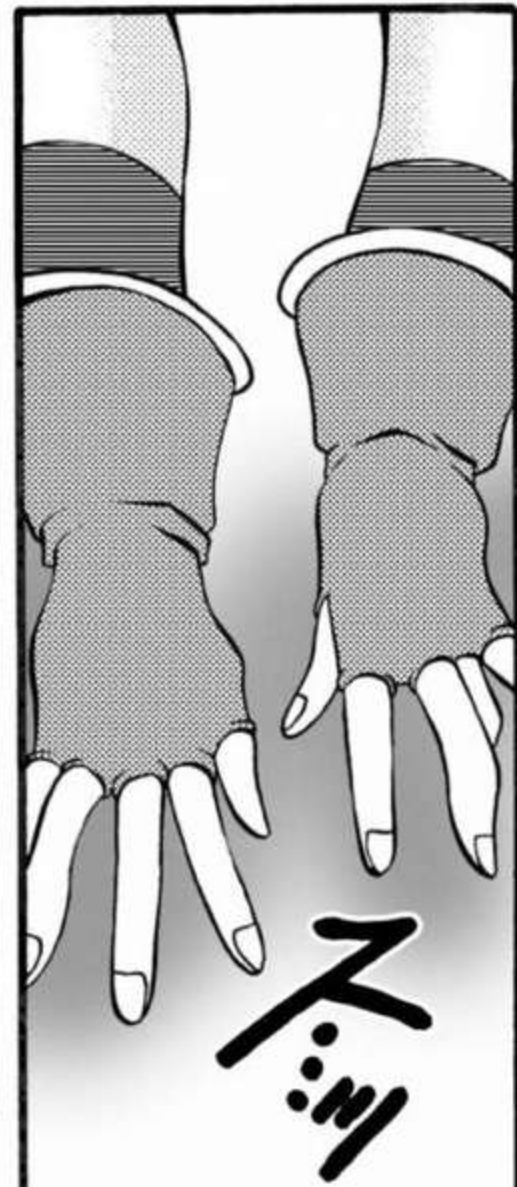
だるめ♪
アテナさんは
奴隷なんだから

アテナさんよ

やる前に
しなきゃ
いけない事が
あるでしょ?



お…



ズン



あ…

わかり
ました?



笑顔で
やるんですよ

…?

お：
お願いです…
アテナに

いやらしい
アテナに
オチンポ…

オチンポ
なめさせて
ください…

オチンポ
へろへろさせて…
精液
飲ませてください…



アテナ
さん…

ゴク…

ヌロ…

ハ…

ハ…

ハ…

あはあ…

スシ…

オチンポ…

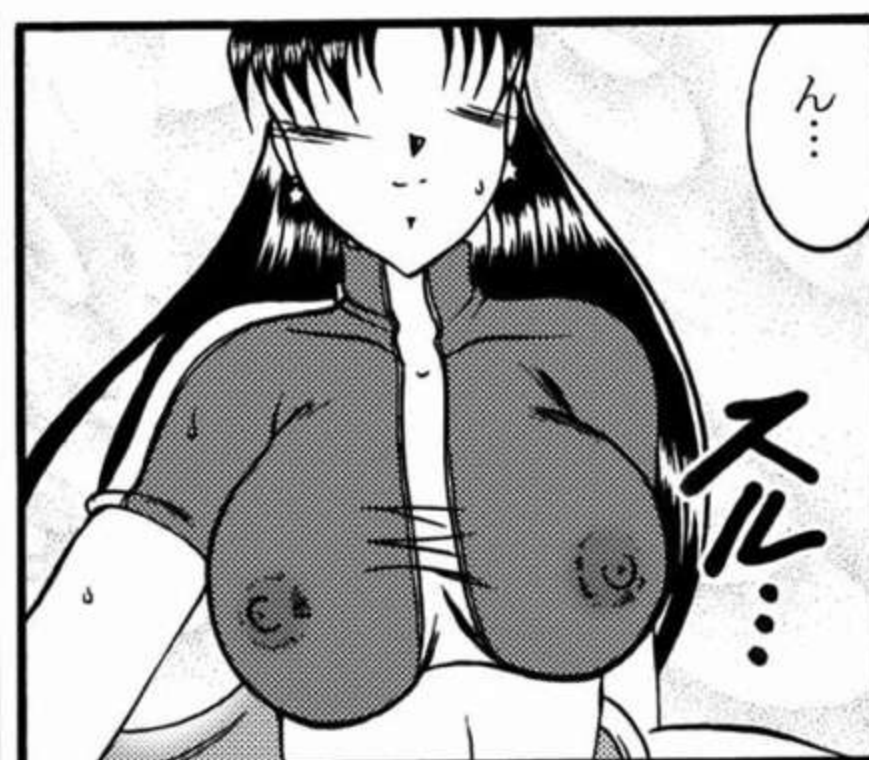
スシ…

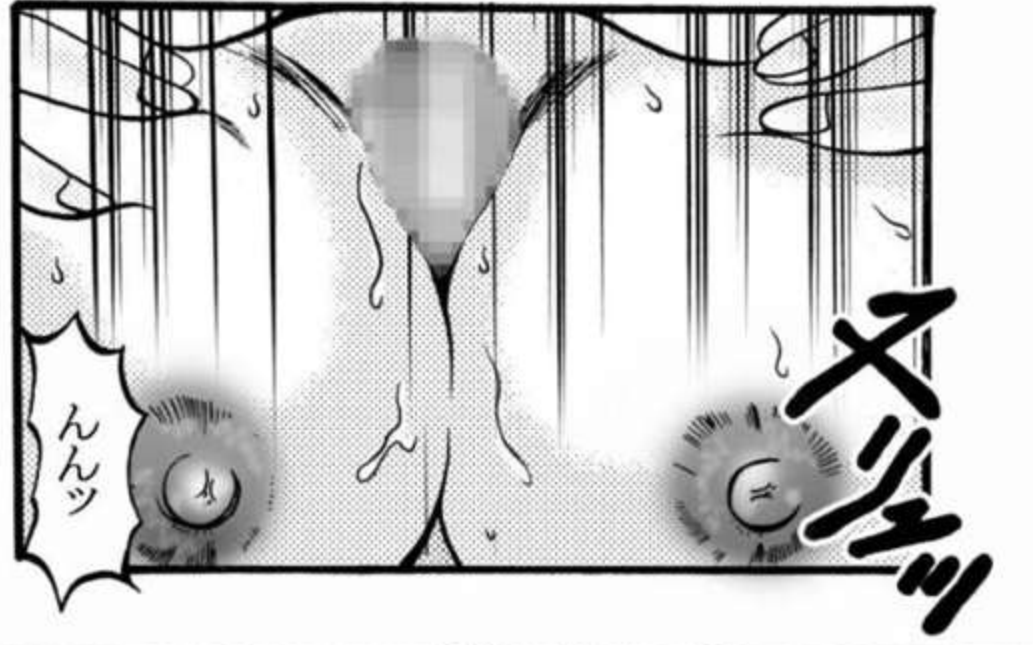
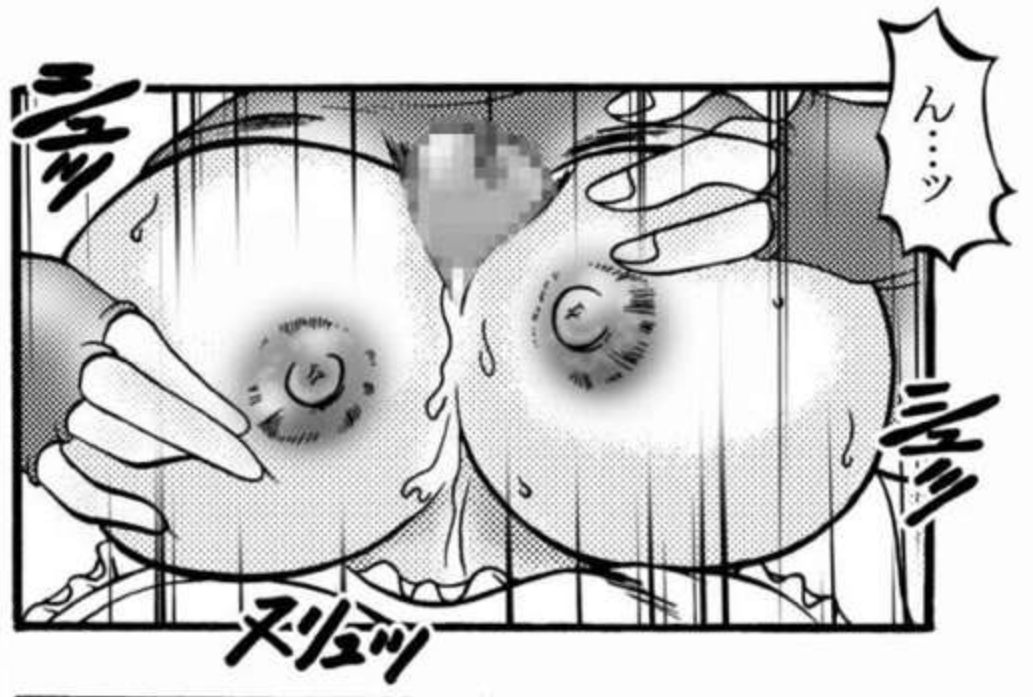
そんなじゃ
好きなかっ
しやぶつて
いいですよ



はいよく
できました







52





おいしいのお...
精液い...

あふ...へ...
精液...
精液いっぱい...
おいしひ...

ゴク...

ゴク...



んっんん
飲ませて...
精液...
んぐ...っ



はっ...あ
アテナさん...
薫の
ザーメン...

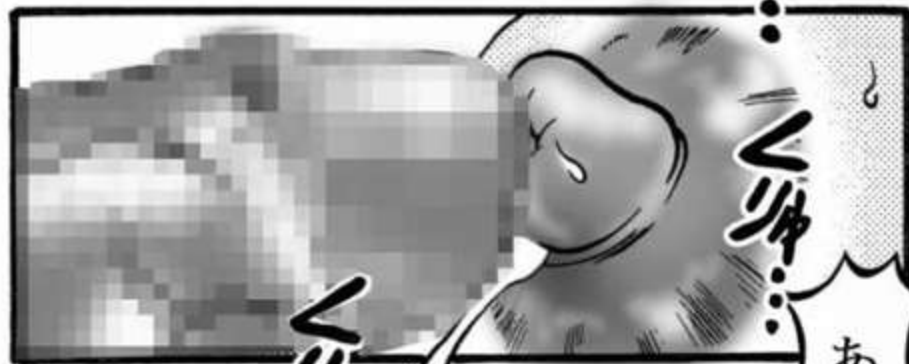
たっ...
ふあ...あっ



あははっ
アテナさんも
派手に
イツたみたいだね

さあ...









出してえ...
アテナに
いっばい
出してえ...!



あむう...
オチンポオ...
オチンポお...

ビクッ

薫のチンポ…
出てるう…

あつ…ああ…
ザーメン
出るう…う

ビク…

もつとお…
もつと
飲ませてえ…



ふう〜
出た出た

スッキリ?

あへ…
せーえき…
精液い
好きい…

ビクッ…

ビクッ…

ビクッ…

カメラに
どぞ♪

さて
それじゃ
アテナさん

あは…
アテナは
精液大好きなの…

変態アイドル
です…

変態アテナの
お口に…

精液飲ませて…
ゴックンさせて
ください…



文章担当の榊しげるです。今回は原案でも参加してます。しかし、アナル調教の次はフェラ調教って女性器には用無しですか。そうですか。アノノーマルな世界一直線ですね。←この二人、SS書いてたらなんか気に入ってしまったので、次回は二人で責め役とかやるかも……で、次回はいよいよナコルル&ほたる！ じゃないことは確かなんだよなあ（泣）

この度はスタジオきゃうん発行「傀儡調教 Case:02 麻宮アテナ」をお買い上げいただき誠にありがとうございます。さて、今回の Case02 ですが、Case01 が去年末（冬コミ）だったので、本当はもっと早くに出したかったんですけど、結局夏コミまでずるずると延びてしまいました…。コピー本などの予告で楽しみにしてくださっていた方、申し訳ありません。アテナに関しては前から好きで何回か描いてるんですけど、KOF2002 のアテナはかなりお気に入りでした。デザインもいいし、ドット絵もすごくよく描けてると思います。登場シーンや勝利セリフなどずいぶんイメージ変わってますがそこもイイですよ。個人的には「もぎたてのプルプルっ！」も好きだったり（作品のどこかで言わせたかったんですけどどうにも上手く組み込めず無念ダムネン…）。なので「傀儡調教は今年（のデザインで）描かねばっ！」っていうカンジです。単純に '02 アテナだから Case02 という話もありますが（逆かしら）。

今回の調教は…アテナで描くことが決まった時点ですでに「フェラ奴隷」にする事は決まっていたんですけど、いろいろと悩んだところもあって時間がかかってしまいました。何故アテナでフェラ？ というのは…何故でしょう（おいおい）？ なんとなくそういうイメージが漠然と…。いや別に普段からアテナ見ると「フェラしてくれ〜」とか思ってるわけじゃないです…。アテナの特徴の一つの「アイドル」をいかして「定番のアイドル調教！ パイプ入れてコンサートや生番組に出演させたり、茶屋でやったり」にしようかしら、とか（いかん、書いてたらちょっと描きたくなってきた…これは次回以降（？）という事で…）。またもう一つの特徴「コスチューム変え」をいかして歴代コスチュームで調教したほうがいいんじゃないか、とか（これはイメージがブレそうなのでやめました）。フェラばかりだとちょっと弱い（顔のアップばかりになっちゃうし…）ので本番をやるかどうか（これは最後まで悩んだんですけどね…）とか。結局今回の本はこういうカタチでまとめてみましたが（まさかあとがきから読んでないですよ…）、個人的には結構気に入っています。あなたにも気に入ってもらえれば嬉しいです。

さて、今回意外なキャラが二人。薫ちゃんはそんなに以外でもないかな…？ アテナに対するチンコ役で出すならケンスーより薫ちゃんかな、と（当然フタナリ化…ってこの発想がすでにおかしい？）。読者さまからの（アテナやるなら薫ちゃんも出してって要望も結構あったので）。02 の登場デモに出てくる（いきまっしょい！の）二人ってのも考えたんですけどいかんせん資料が…っちゅうかあの二人、誰（名前とかあるのかな）？

エルは…好きなので。それ以外にもエルが出てきた理由はあるんですけどまだちょっとナイショです。次回以降に（え、レギュラー？）その秘密が…ナノマシン以上の反則が炸裂予定（今回もちょっとやっていますが）。今回はあんまり出番がないですけど、次回以降は性格等、さくらとの差別化もしていきたいです。あくまでメインのタチ役はさくらで行きますけどね（あ、でも今回の番外編でエルが薫ちゃん調教するショートストーリーは描きたいかも）。

この「傀儡調教」は（Case02 の名前の通り）シリーズ化しようと思っっています。とりあえず SNK キャラオンリーで…次回 03 は未定ですが、色（サムスピ）が描きたいなあとか思ってます（元々傀儡なのをどうやって傀儡調教するのか!? 期待せず待て！ 本自体出るとは限らない！）。あとはリクエストのあった藤堂香澄やリムルルあたりが候補で、榊しげるが「ナコルル&双葉ほたる〜」と言ってますが…まあ愛慰奴が完結してからね（いつになるやら）。みなさんも①このキャラ（できれば SNK キャラ）を②こんな風に奴隷調教（例えば今回みたくフェラ奴隷とか）っていうリクエストありましたらお教えてください。描けるかどうかはわかりませんが、参考にさせていただきます。よろしくです。

今回、2 回目のデータ入稿です。前回のノウハウがあったのでかなりスピードアップできたんですけど（いろいろ新テクも導入したし）、印刷に綺麗に出るか未だ不安です。綺麗に出てるといいな…もしテキスト（イラストに入ってる文章）読みにくかったらゴメンナサイ。

今回の Help! 原案およびネーム協力の榊しげるくん。いくつもアイデア出してもらったのに半分ぐらいしか使えなくてすいません。「オールフェラ 万六ライダ 部隊五万人ぶっかけコンサート」描きたかったヨ（でも「五万人だ！」は描くのヤダなあ…）。

そして誰より、これを読んでくれるあなたに。

みんなアリガト！ サイコオだよ！！
それではまた次の本で〜。

榊しげる★

文字小さくて読みにくかったらゴメンナサイ…。

「傀儡調教 Case:02 麻宮アテナ」
発行：スタジオきゃうん
発行日：2003 年 8 月 17 日
印刷所：太陽出版
編集人：大矢信之
連絡先：350-0033
埼玉県川越市富士見町 31-38-302
村上 雅貴
sslginza@mui.biglobe.ne.jp

*18 歳未満の方の購入はお断りしております。
また無断複製・転載およびインターネット上での
無断アップロード等もご遠慮ください。
スタジオきゃうんホームページ
<http://karen.saiin.net/~kyawn/>



「お願いです…」

アテナにあなたの精液飲ませてください…」

クライアント
「報告書：依頼人からの要請どおり、麻宮アテナを精液飲み奴隷として調教しました。フェラチオ、手コキ、パイズリ等各種技術を習得させ極限状態で洗脳…結果、精液を飲めば必ず絶頂に達する精液アイドルとしての自分を受け入れさせることに成功。男性器を見るだけで発情し精液を欲しがるようになっています。ご満足いただけるものに仕上がったと思います。

担当者・報告：春日野さくら」